

# バロン薩摩と香水

高島靖弘 理事、事務局

## はじめに

第一次世界大戦が終結した後、パリには平和と活気が戻る。世界各地から芸術家たちが集まり、「レザネ・フォル（狂乱の時代）」と呼ばれる時代を迎える。そんな時代に、豪快に生きた日本人がいる。

「800億円の財産を使い果たした大富豪の華麗なる人生」、「稀代の蕩児か、平和の使徒か」、「日仏交流のキーパーソン」、「パリ日本館こそわがいのち」、こんな文言が書籍の帯を飾っている。バロン薩摩と呼ばれた薩摩治郎八とは、どんな人物なのだろうか。

治郎八は1901年、極貧から一代で巨富を築き上げ「明治の綿業王」と呼ばれた実業家、薩摩治兵衛の孫として東京・神田に生まれた。

1920年弱冠19歳で法律、経済の勉強のため渡英する。

すぐにセルゲイ・ディアギレフの率いる「バレエ・リュス」に魅了され翌年パリへ移る。しばらく浮名を流していたが、一度帰国し26歳の時美貌の伯爵令嬢の千代と結婚後再度渡仏した。



薩摩治郎八

パリで夫人は磨かれ、ファッション誌を飾りパリ社交界の華になった。絵画をもたしなみ、藤田嗣治に「ドーリー」と呼ばれ可愛がれ、日本人画家の間で人気者であった。

しかし健康を害し、日本で療養に専念したが若くして亡くな

っている。

治郎八の信条は“Noblesse oblige（高貴な自分はそのらしくあることを義務付けられる）”であった。貴族趣味の贅沢を尽くし、交遊はきわめて華やかであったがもう一方では、自分が関心のある文化事業に熱心で、特にパリ国際大学都市の日本館建設に莫大資金を提供した。爵位がなかったにもかかわらず、

敬愛を込めて「バロン（男爵）」と呼ばれた。

ここでは、フランス文化に心酔した治郎八の卓越した香り、香水観について紹介したい。

## 薩摩治郎八のメセナ

治郎八の「香水物語」に入る前に、まず彼の業績を簡単に案内しておきたい。

(1)フランス人ピアニスト、アンリ・ジル＝マルシェックスの招聘（1925年）

当時の日本にはドイツ古典派・浪漫派の音楽しか入ってなかった。フランス政府からヨーロッパの近代音楽を日本へ紹介するという文化事業を託される。彼は、ピアニストのアンリ・ジル＝マルシェックスを招聘した。

震災で焼け残った帝国ホテルの演芸場で盛大な演奏会を開催する。彼自ら豪華なプログラムを作成している。

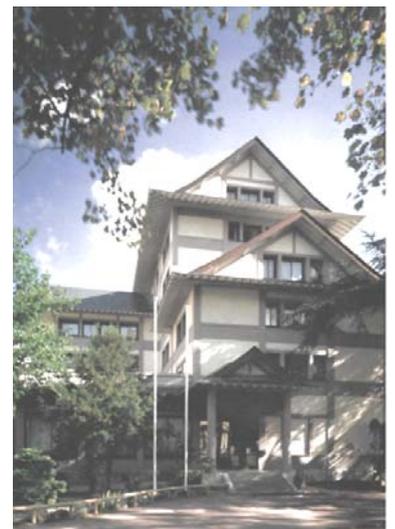
(2)パリ国際大学都市日本館「薩摩館」の建設、寄贈（1929年）

パリ国際大学の日本館建設が日本の政府に打診されたが、財政難の政府に代わり薩摩家が資金を提供した。この功績でフランス政府からレジオン・ドヌール勲章が与えられた。

ピエール・サルドウが設計した。日本の城を模した地上7階半地下1階の大規模なものとなった。

藤田嗣治が作成した『欧人日本へ到来の図』、『馬の図』の大壁画が館内に飾られた。

開会式には、フランス大統領、首相など内外の要人が多数参加した。その後に、300人を招待してホテル・リッツで豪勢な大晩餐会を主催している。



パリ国際大学都市日本館

日本館は今も、世界各地からの留学生を受け入れている。

### 「香水物語」

治郎八は、1951年に帰国する。財産の殆どを失って生計を立てるため新聞雑誌に執筆を始める。彼が交流した日仏の画家、音楽家、小説家、そして政治家、貴族、王族と多くの有名人が登場し、フランス文化の紹介にとどまらず自己の実体験に基づく話は興味深い。

自著には『巴里・女・戦争』（1954）、『せ・し・ぼん』（1955）、『なんじゃもんじゃ』（1956）、『炎の女』（1956）、『ぶどう酒物語—洋酒と香水の話』（1958）などがある。



ぶどう酒物語  
—洋酒と香水の話

『ぶどう酒物語—洋酒と香水の話』を20年前古書店で見つけ、国際香りと文化の会の『VENUS』誌に紹介する機会もあるかと思いい買い求めていた。この中に「香水物語」の章があり、古代の香油からはじまり、香水の原料、香水の歴史から日本の香水まで広範に話が及ぶ。

まずは、彼のフランスでの華麗な生活が窺われる

本書の「あとがき」から紹介する。

「洋酒に親しみ、香水を愛する人は多い。が私のようにあらゆる土地や雰囲気なかで、この二つの欲望を満たした者は地球上にそうたくさんはいないはずだ。

世界無宿、永久の浮浪児の私は、王者貴族の饗宴の食卓酒から、屋台酒までを飲み歩いた。そしてその間に皇后王妃から絶世の美女の香水の移り香をかいた。私はこうした種々様々なムードの中で、私自身の酒と香水の美学を創造した。その物語がこの一冊として生まれた」と言う。

晩年の治郎八を徳島に訪ねた獅子文六は「但馬太郎治伝」の中で、「彼が動くたびに、ひどく、いい匂いがしてくるのに、気がついた」と言っている。最後まで粋な生活スタイルは変えなかった。

### パリの夢

治郎八は、調香師は作品によって人々に憧憬の幻像をマザマザ再現する。これが香水が最高の芸術である理由であると言う。

「香水こそは我々がどこでもかげるパリの匂いであり夢である。いやパリばかりではない、遠い近東の詩でもあり、紅海のはて砂漠の空に消えゆく蜃気楼の幻想でもある。

パリの香水芸術家達はその優秀な感覚で、あらゆる夢を生み出す。青春の甘い思い出、季節のリズム、音楽のメロディー。そしてこればかりは絵画や、彫刻や、文学や、モードや、料理や、ぶどう酒などのようにフランスならではの生まれぬ芸術なのである。」

そして、治郎八の最も愛する香水として『クリスマスの夜（ニューイ・ド・ノエル）』を挙げている。

「私の最も愛する香水の一つにキャロン製の『クリスマスの夜』がある。

私はその得もいわれぬ郷愁的な香気を嗅ぐと、雪に包まれたヒマラヤ杉の木立にかこまれた寒村のクリスマスの夜の教会の窓の明かりを連想する。それはあらゆる風土や気候をこえて、私の胸に聖らかな夜の曲調の銀線を震わせる。」

『クリスマスの夜』は、ジャスミン、ローズ、イランイラン、オポポナックス、アンバーそしてスペシャリティ・ベースのムス・ドゥ・サクス (Mousse de Saxe)を大胆に使ったオリエンタル調の香りで1920年代のよきパリを彷彿とさせる。重厚感のあるバカラ製の黒いボトルとエイ皮模様が使われた印籠のようなパッケージは東洋的である。彼の芸術・人生に対する思いが分かる香水である。



クリスマスの夜

### 香水の階級

治郎八は、香水にはそれを愛用する女性に階級があると

言う。「一概に香水と言っても、ピンからキリまであることは皆様も御承知のことだ、が香水の階級、毅然たる階級を知らぬ日本の一般の人々は、思わぬところで無智な馬脚を現すことがある。

なにも気取った会話の種にする必要はないが、常識的に香水の階級を知っておくことは無駄ではなからう。」

「ウビガン、コティ、モリナール等が一般向けの高級香水ならば、キャロン、ゲラン、シャネルの三社は豪華香水の三羽鳥といえよう。」

ウビガンの『ケルク・フルール』は、春の野花の芳香を取り混ぜた若々しい薫風そのものの新鮮な名香水であると言い、コティ『ミューゲ』『エメロード』をあげ、モリナールの『クリスマスベル』などを紹介している。

キャロンが創造した『ナルシス・ノワール（黒水仙）』は、その妖香で世界の黒髪女性を征服した。

「悪の華」的香気は、やがて性的女性の愛用香水と化した観があると評している。

ゲランが一番暖簾が古く、その製品は古くから知られている。またゲランが近代香水の創始者として合成香料の先鞭をつけたのは香水史上特記すべき偉功である。ゲランの名声を国際的に博したのは『ミツコ』である。ミツコの名前は世界の女性の紅唇に膾炙した。現在では、香水界の古典的女王の座をしめしていると高く評価している。



ミツコ

### ウォルトとポール・ポワレ

「最高級の貴族衣裳店として英国王室の寵を得た古いのれんのウォルトの香水『夜中に（ダン・ラ・ニューイ）』と『暁光へ（ヴェール・ジュール）』は香水界の二王妃である。

『夜中に（ダン・ラ・ニューイ）』の濃紺色に星くずをきらめかした丸瓶の感触も、パリならではの嘆声をはっせる芸術品である。」



ダン・ラ・ニューイ

「上品な貴婦人用として、この二香水に優るものはない。」

治郎八は、ポール・ポワレを高く評価し、ポワレの香水は衣装や女性の個性

とピッタリ調和する。これは「ロジーヌ」は香水史上の一革命期を画したと言う。

その後の香水の出現は、「裂れ」よりも「香り」のほうが強い世相を現示していると言う。

少しポール・ポワレについて触れておきたい。

ポール・ポワレは、オートクチュールの創始者であるウォルトのメゾンで働いていた。その後、自身のメゾンを設立した。

第一次世界大戦が終わり、街は華やかさに満ち、さまざまな文化の最盛期に入る。コルセットから女性を解放し、着心地のいいスタイルを確立したのが、ポール・ポワレとシャネルだと言われる。

ポール・ポワレは1911年に香水専門の「ロージン」を開設する。ファッションと香水を結びつけた先駆者である。

それまでは、ヤードレー、ウビガン、ゲラン、ロジェ・ガレ、コティ、キャロンの香水専門店によって、天然香料を主にした香水が発売されていた。

ポール・ポワレ以後オートクチュールのシャネル、ランバン、ジャン・パトゥ、スキヤパレリ、ディオールなどがデザイナー・ブランドの香水を牽引していく。

香りの傾向も、合成香料を巧みに使い、ファッションに合わせて大きく変わっていく。1950年代以降はコロンの到来とみなしている。

### 日本の香水

「文明開化の明治時代の日本人が、香水に親しみだしたのは、日清戦争前後でロジェ・ガレ社のヘリオ香水（ヘリオトロープ）が当時の『ハイカラ』族によってもはやされた。それが日露戦争時代となると、やはりロジェ・ガレ社の『恋の花（フルール・ダムール）』香水が満都の女子の憧れの的となった。

その箱から『赤箱』香水と呼ばれ、新橋花柳界の一流芸妓は赤箱なくてはお座敷がつとまらぬまでの寵児となった。」

「日本人もいつまでも『シャネル五番』にだけ陶醉していずに、独創的な日本人の高級香水を日本の梅とか藤とか



フルール・ダムール

木犀とかを原料として近代的の混成人工香水を完成し、日本文化の水準の高さを自信し、また、世界の香水のニューフェイスとして海外市場に輸出すべきである。」

このように、香水物語を結んでいる。

これは60年程前にフランスで生活し、天国と地獄を経験した香水愛好者の提言である。今日でも色あせていないと思う。

## 参考文献

薩摩治郎八『ぶどう酒物語－洋酒と香水の話』

村山書店 1958年

『芸術新潮1988年12月号 薩摩治郎八特集号』

清岡卓行「パリに結ぶ夢の深さ」『新潮1998年6月号』

『薩摩治郎八と巴里の日本人画家たち展』図録

横浜そごう美術館1998年

獅子文六『但馬太郎治伝』講談社文芸文庫2000年

瀬戸内晴美『ゆきてかえらぬ』文春文庫 1976年

村上紀史郎『バロン・サツマと呼ばれた男 薩摩治

郎八とその時代』藤原書店 2009年

小林茂『薩摩治郎八－パリ日本館こそわがいのち』

ミネルヴァ日本評伝選 2010年

鹿島茂『蕩尽王、パリをゆく －薩摩治郎八伝－』

新潮選書 2011年

『あそぶかたち 20世紀の香水瓶』

ポーラ文化研究所 2005年

マイケル・エドワード『パヒュームレジェンド

世界名香物語』

フレグランスジャーナル社 2005年

ロジェ・ガレHP

## ■ 薩摩治郎八 年譜

- ・薩摩治兵衛（祖父）1831－1909  
（極貧から一代で巨富を築き上げ、明治の綿業王と呼ばれる）
  - ・薩摩治兵衛（父） 1881－1958  
（蘭の花と洋書、日本古美術を趣味とする）
  - ・薩摩治郎八 1901－1976
- 1920 19歳でイギリス留学（芸術に感化、パリに渡り人脈を広げる）
- 1923 [関東大震災]
- 1924 一時帰国
- 1925 フランス人ピアニスト、アンリ・ジル＝マルシェックス日本公演（支援）  
在巴里日本人美術家展「日本人会展」（支援）
- 1927 伯爵山田英夫の長女、千代と結婚。  
夫人と渡仏（社交界で注目を浴びる）  
二代目市川左団次のために書いた岡本綺堂の戯曲「修善寺物語」パリ公演（支援）  
父子でレジオン・ド・ヌール勲章を受章
- 1929 パリ国際大学都市日本館「薩摩館」（寄贈）  
仏蘭西日本美術協会展「薩摩展」（支援）  
（藤田嗣治、萩須高德、岡鹿之助、藪谷虹児、高野三三男）  
[世界恐慌]
- 1935 薩摩商店が閉店
- 1939 戦火の中、渡仏
- 1945 [太平洋戦争終結]
- 1949 千代夫人死去
- 1951 帰国
- 1954 文筆活動 「巴里・女・戦争」など出版  
（パリでの思い出やかつての恋愛、ロマン、生活などをエッセーなどに書く）
- 1956 徳島出身の女性と再婚
- 1959 徳島で脳卒中の療養
- 1966 フランス外務省の招きを受け夫人と渡仏、フランス芸術文芸国家勲章を受章
- 1973 日仏の文化交流に尽くした功績により勲三等旭日中綬章を受章
- 1976 74歳、徳島で死去